

富山県小矢部市

平成21年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報

2010年3月

小矢部市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、2009（平成21）年度に富山県小矢部市教育委員会が、国庫補助事業として実施した市内遺跡発掘調査等事業の概要報告書である。
2. 調査は、小矢部市教育委員会が実施した。ただし、埴生条里遺跡と埴生南遺跡の調査は㈱アーキジオに委託した。担当は次のとおりである  
　調査事務：中井真夕（文化スポーツ課主任）  
　現地調査 中井真夕：石名田木舟遺跡（本発掘調査）、後谷条里遺跡、石名田木舟遺跡、蟹谷条里遺跡、福田遺跡、大勢町遺跡  
　上野　章：（㈱アーキジオ埋蔵文化財事業部調査担当者） 売生条里遺跡、  
　埴生南遺跡  
　※本発掘調査については、調査費用の農家負担分（11.5%）を国庫補助している。
3. 調査の参加者は次のとおりである。 現地測量・実測、整理作業等：浅井誠、野沢世系江
4. 現地調査の作業員は、（社）富山県シルバー人材センター連合会から派遣を受けた。
5. 本書の編集・執筆は中井が担当した。埴生条里遺跡と埴生南遺跡については上野氏が執筆した。
6. 本発掘調査については、事業主負担で「富山県小矢部市 石名田木舟遺跡発掘調査報告書－ほ場整備（経営体育成基盤整備事業）地崎地区に伴う埋蔵文化財調査－」を刊行している。
7. 土層の色調については『新版 標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著、1967）に準じて  
　いる。
8. 出土遺物及び記録資料は、小矢部市教育委員会が一括して保管している。

## 目　　次

事業の概要	1
市内遺跡発掘調査等事業一覧	2
市内遺跡発掘調査等事業位置図	3
石名田木舟遺跡	4
埴生条里遺跡	5
埴生南遺跡	9

## 事業の概要

### 21年度の概要

2009（H21）年度に小矢部市内において実施した埋蔵文化財の発掘調査等は10件である。うち3件は本発掘調査で、このうち1件については調査費の一部を国庫補助で実施しているが、ほか2件は事業主負担で実施した。また、市内遺跡発掘調査等事業として国庫補助を受けて7件の試掘調査を行った。開発行為の事前協議、民間・個人による小規模開発、農地転用・農業振興地域除外申請に伴う問い合わせ等が40件あまりあった。

調査の原因は開発行為別にみると、個人の住宅建設等に伴うもの、携帯電話基地局設置に伴うもの、経営体育成基盤整備事業（ほ揚整備）に伴うもの、土地区画整理事業に伴うもの、宅地造成に伴うもの、などと多様である。また、原因者は、個人3件、民間事業所3件、公共団体1件である。

このうち特筆すべきは、土地区画整理事業に伴う試掘調査を実施した埴生条里遺跡である。調査地は対象面積が140,000m<sup>2</sup>と広大であり、河岸段丘上で高低差があるため、近年実施している重機械による調査が困難であったことなど、ほかにも様々な障害が発生した。しかしながら、地元の方々や関係者に協力をいただいて、無事に調査を終えることが出来た。対象地の南側には、北陸新幹線の敷設予定地があり、平成18年度に試掘調査を行っている。その結果、昭和40年代に隣接する川の改修工事があったことや、圃場整備等により、近現代の遺物は出土したもの、遺構は検出されなかった。この結果を受け、今回の調査においても同様の調査結果を予測していた。しかしながら、遺構は確認できなかったが、様々な時代の遺物が多量に出土した。本発掘調査の必要は無いと判断したが、新たな発見として本書報告する。

また、埴生南遺跡では、今回の調査地の隣接地一帯で、以前に本発掘調査を実施しており、古代や中世の遺構・遺物が発見されていることから、同様の結果を予測していた。調査の結果、調査地の北側に流れる尾沙門川の影響で、中央部分から北側は川に向かって傾斜しており、遺構・遺物は確認されなかった。しかし、中央部から南側半分には、明確な遺構は確認できなかったものの、奈良時代前半の須恵器の大型甕が2個体分が出土した。原因者と協議を重ね、次年度に本調査を実施することとなった。

前年度と比較すると、調査件数は減少したものの、本発掘調査があったため、調査内容は充実したものになった。

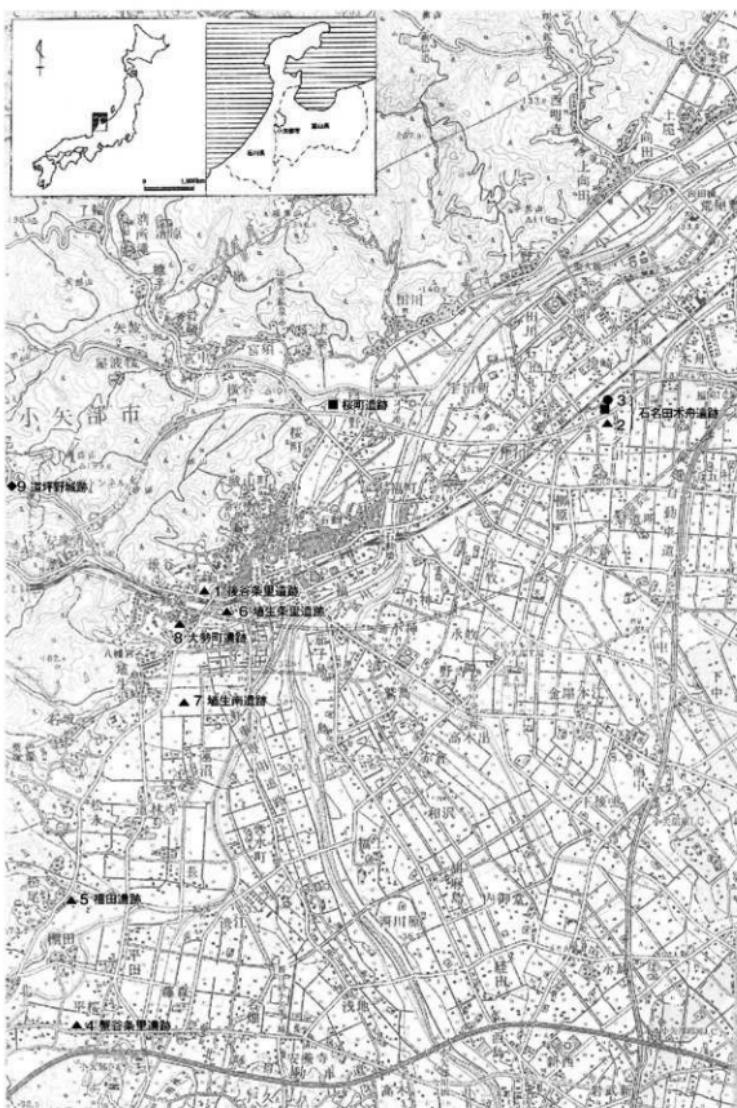
### 現地確認

現地確認は、石川県との県境の道坪野地内に所在する道坪野城跡の付近で、駐車場建設を計画していることから、専門家を交えて現地確認を実施したものである。当該遺跡は、昨年度も風倒木処理に伴う「みどりの森再生事業」の計画が予定されたため、現地調査を実施した。調査の結果、建設予定地に集落へ続く旧道が良好に残っているため、開発予定者と協議し、削平等はせず、盛土したうえで整地する工法を行うことでご理解をいただいた。

## 市内遺跡発掘調査等事業一覧

No.	遺跡名	所在地	調査対象面積 (測量面積)	調査種別	現地調査等 期 間	調査結果	調査原因
1	後谷条里遺跡	後谷396-5	203 m <sup>2</sup> (5 m <sup>2</sup> )	試掘調査	21.6.8	遺構確認されず。 遺物出土せず。	個人住宅建設
2	石名田木舟遺跡	地崎地内	1,200 m <sup>2</sup> (80 m <sup>2</sup> )	試掘調査	21.6.8 ～ 21.6.9	遺構確認されず。 須恵器、土師器出土。	経営体育施設整備
3	石名田木舟遺跡	地崎地内	680 m <sup>2</sup>	本調査	21.6.15 ～ 21.8.6	(古代)土坑20基、 柱穴2基、川跡1条 (中世)土坑20基、 柱穴6基、井戸1基、 川跡1条	経営体育施設整備
4	蟹谷条里遺跡	平桜6175-35	100 (6 m <sup>2</sup> )	試掘調査	21.9.1	遺構確認されず。 遺物出土せず。	個人住宅建設
5	福田遺跡	松尾5004	9 m <sup>2</sup> (1.5 m <sup>2</sup> )	試掘調査	21.9.1 ～ 21.9.2	遺構確認されず。 遺物出土せず。	携帯電話基地局設置
6	埴生条里遺跡	石動町地内	140,000 m <sup>2</sup> (700 m <sup>2</sup> )	試掘調査	21.10.5 ～ 21.10.30	遺構確認されず。 縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器、 中世土師器、珠洲、 近世陶器等出土。	土地造成 年度、一部本調査実施予定。
7	埴生南遺跡	埴生282-1 ほか	1,427 m <sup>2</sup> (140 m <sup>2</sup> )	試掘調査	21.11.4 ～ 21.11.9	流路跡。 須恵器、土師器、 珠洲出土。	宅地造成 年度、一部本調査実施予定。
8	大勢町遺跡	埴生435-3	326.9 m <sup>2</sup> (6 m <sup>2</sup> )	試掘調査	21.11.24	遺構確認されず。 遺物出土せず。	個人住宅建設
9	道坪野城跡	道坪野地内		現地確認	21.4.4	旧道確認。 遺物出土せず。	駐車場建設

## 市内遺跡発掘調査等事業位置図



●本発掘調査

■国補対象外の本発掘調査

▲試掘調査

◆現地調査

(1 : 50,000)

# 石名田木舟遺跡

図1 調査位置  
(1/10,000)



## 調査の概要

石名田木舟遺跡は市域の東側に位置し、市域中央を貫流する小矢部川と砺波平野を貫流する庄川の扇状地に立地する。遺跡の範囲内には、高岡市福岡町に所在する木舟城跡を含む広大な遺跡である。今回の調査は経営体育成基盤整備事業（ほ場整備）に伴うもので、調査地は遺跡範囲の西端に位置する。現状は水田である。

現地調査は2009年（H21）年6月8、9日の2日間実施した。調査対象地1,200 m<sup>2</sup>に1.5×12 m (T1)、1×10 m (T2・T3) を2本で計3本の試掘トレンチを設定し、遺構及び遺物の有無を確認しながら、重機械により掘削した。掘削面積は38 m<sup>2</sup>、最終的な掘削深度は1 mである。基本層位はI層：水田耕作土、II層：黒褐色砂質ローム、III層：灰色シルト質ロームである。IV層オリーブ黒色粘土、V層：黒色腐植土、VI層：灰色粘土、VI層以下は礫層である。V層の前後層から、水が溜まる時期や植物が生える時期があった場所で、遺構等の人間の営みがあった痕跡は確認できなかった。遺物は須恵器、土師器等の古代の土器が少量出土した。近隣には、古代の遺構・遺物が大量に発見されていることから、そこからの流込みの可能性が考えられる。

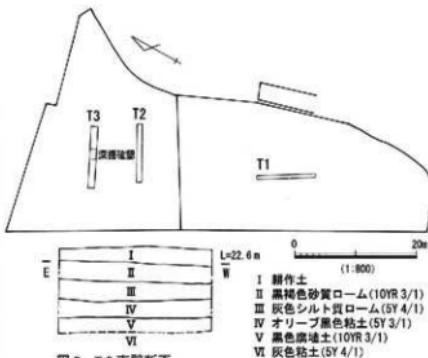


図2 T3南壁断面

## 埴生条里遺跡

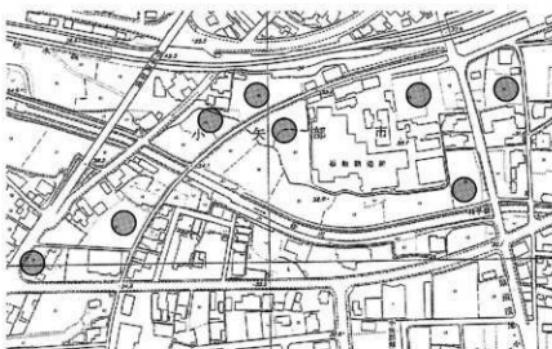


図3 調査位置  
(1:10,000)

### 調査の概要

埴生条里遺跡（埴生保）は渋江川・小矢部川の合流点から西側山麓にかけ埴生地内に存在する。『石清水文書』の1158年（保元3）12月3日付の官宣旨のよって石清水八幡宮の寺領であったとされる。現在この地に護国八幡宮が存在し、この地に寄進されたを契機に勧請されたものといわれている。1407年（応永14）9月17日条に埴生河窪名塩にわたされた記録があり、その頃まで当地が八幡宮の寺領であったと推測されている「中明1994」。

今回の試掘は、平成21年10月5日～10月31日までの間に現地調査をした。埴生条里遺跡の北側にあたり、JR北陸本線から南方約250mまでの区間と、東西500m区内に存在する水田20ヶ所に幅1m、長さ10～40mの試掘トレンチを30ヶ所に設け、深さ1m程掘り下げて、遺構・遺物の有無を把握するため重機を使用して掘削を行なった。総試掘面積は640m<sup>2</sup>であった。

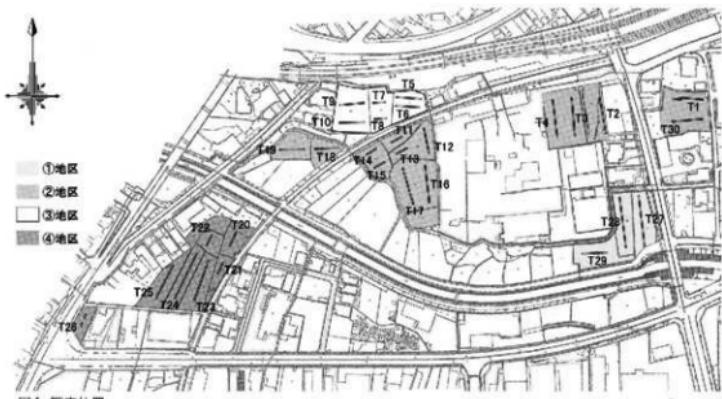
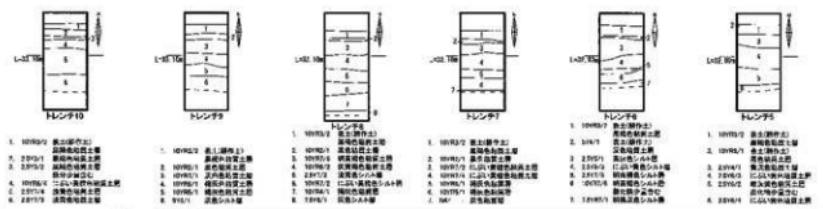
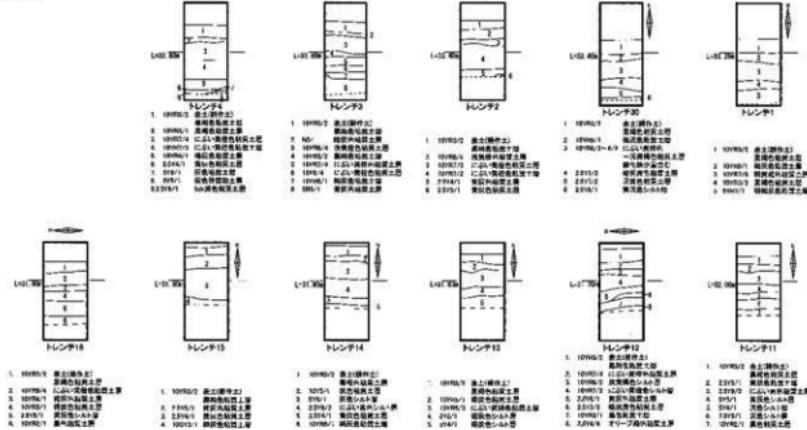


図4 調査位置  
(1:8,000)

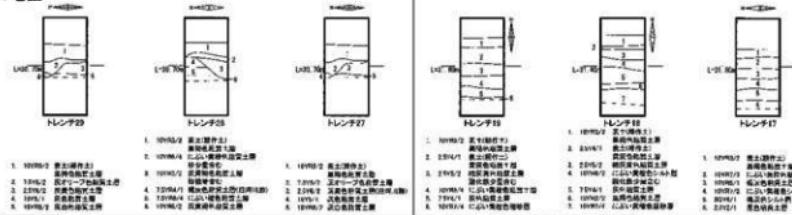
3地区



2地区



1地圖



4地区

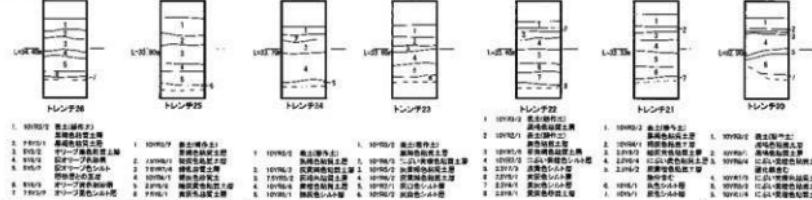
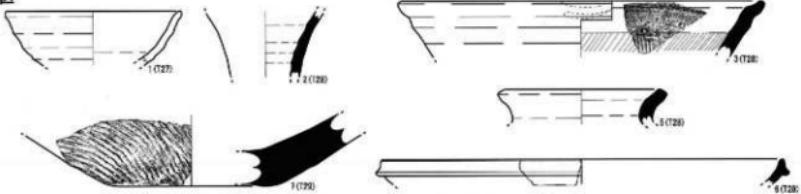
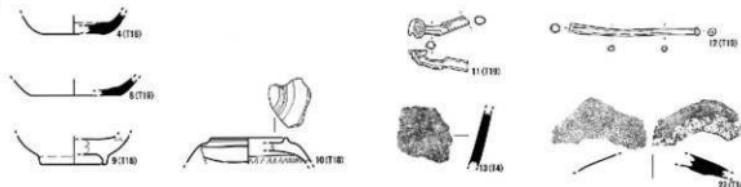


図5 墓生条里遺跡 断面図(1:80)

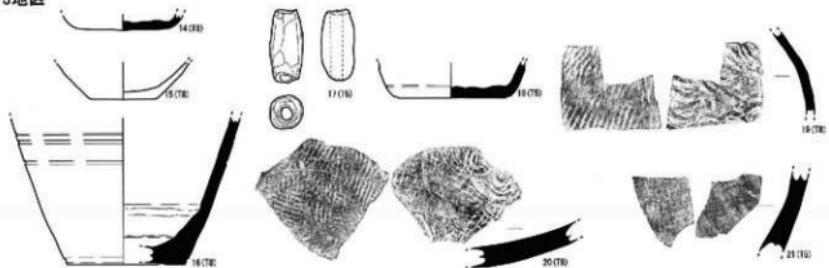
## 1地区



## 2地区



## 3地区



## 4地区

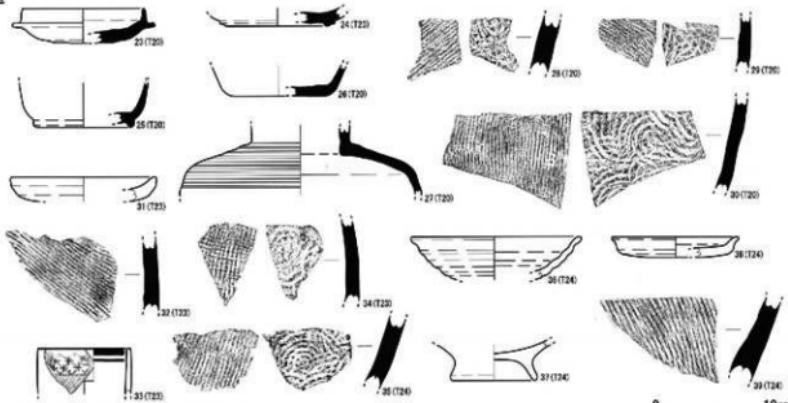


図6 塗生条里遺跡 出土遺物(1:4)

0 10cm

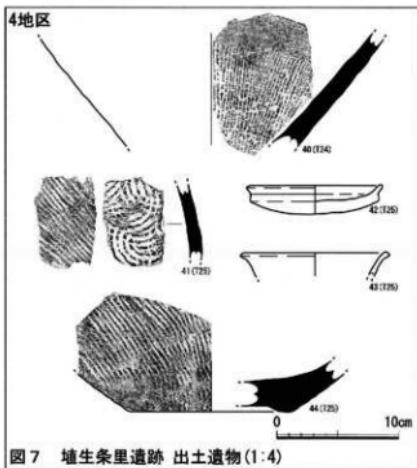


図7 増生条里遺跡 出土遺物(1:4)

各トレンチの土層は図5に示した。調査地の標高は31~34mを測り、標高を基準にして、①~④地区に分けて説明する。左岸の標高31m前後の低い水田を①地区した。次に1.5m前後高い水田を②地区、更に標高34m前後の高くなつた北陸線寄りの水田を③地区とした。砂川の南側台地に位置する標高が34m以上と高くなる水田を④地区とし便宜上区分した。①地区的砂川下流沿い水田は、粘性の強い土質で北側に沿つて幅数十cm余りの黒褐色土を含む旧河跡が東西方向に流れる。覆土から図6-1の青磁楕(13世紀前後)、2の須恵器や3の珠洲鉢と近世陶磁器が出土した。他の区内ではまとまった遺構がなく、土師器等が少し出土した。②地区西側では図6-8の須恵器杯や近世の陶磁器、11のタバコ煙菅、12の吸口等が出土した。土師器が若干下層にみられるが遺構は存在しなかつた。2~4トレンチの下層褐灰色粘土質土層に少し土師器が出土した。③地区的JR北陸線南側の水田は粘質土が主体を占める層であり、表土から50cmから1.1mの深さに奈良・平安時代の須恵器・土師器が比較的多く出土したが(図6-8~22)、遺構は確認できなかつた。④地区は20トレンチ北端から南側5mまでの間に7世紀半ばから8世紀代の土師器・須恵器が(図6-3~30)出土した。表土直下の約50cm前後の深さにまで黄橙色粘質土中のごく狭い範囲からかなりの量が出土した。しかし遺構の存在は確認できなかつた。

図6-31は23トレンチからの13世紀代の土師器皿(深さ40cmから出土)で、表土から33は近世の伊万里そば猪口が1点出ている。34~39は24トレンチ出土の須恵器・土師器であり、36・37は9世紀末頃の土師器であり、共に表土下深さ90cmから出土し、31・24は深さ40cmからで、40は珠洲の鉢で内面全体に御し目があり15世紀頃であろうか。他に表土付近から出土している。

図7は④地区出土遺物であり、41~44は25トレンチからである。41が古代の須恵器であり、42は15世紀前半の土師器皿、44は珠洲の甕であり、外底面に窯跡の離れ砂が全体に付いている。

中島文雄 1994『埴生保』『富山百科事典』 北日本新聞社



## 埴生南遺跡



図8 調査位置  
(1:10,000)

### 調査の概要

埴生南遺跡は中世埴生保の南側に位置する。平成4年住宅建設に先立つ試掘で多くの遺構が発見され、引き続き本調査が実施された。

中世は12世紀後半から13世紀初めに属する掘立柱建物、曲物による井戸などの遺構・遺物が検出されている。また、8世紀初め溝・土坑と人面墨書き土器に類似した鉢、須恵器や集落から陶棺などが出士している『小矢部市2002』。

県内の陶棺出土は須恵器窯から4例と集落跡から2例が知られ、小矢部市の松永1号窯や南砺市安居「い」地区1号窯、射水市石名山2号窯、同市小杉流通団地NO6遺跡と富山市平岡窯『宮田他1986』を含む6遺跡が知られる。時期は7世紀初めから8世紀初めにかけて作られる。

陶棺は古墳時代後期の6世紀後半から8世紀初めにかけて製作されるものである。県内では7世紀代に横穴が盛行する時期であり、被葬者はどのような社会的地位のクラスの人物であったのであろうか。

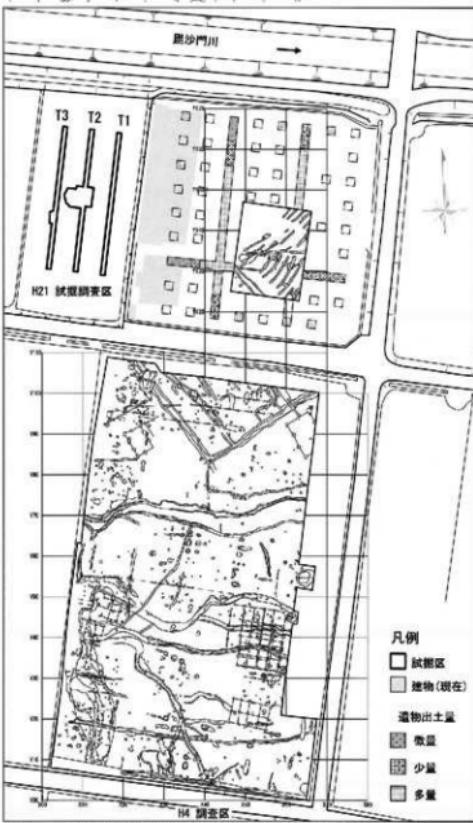


図9 境生南遺跡 既存調査と試掘調査 平面図(1:1200)

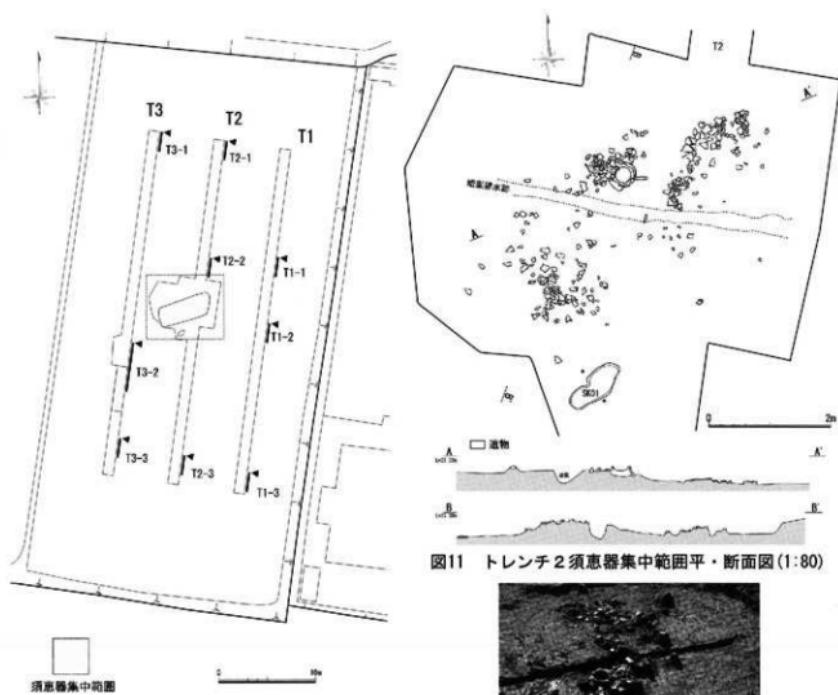


図10 塚生南遺跡 調査区(1:500)

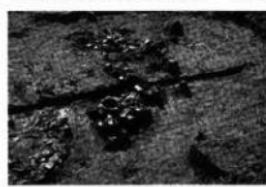


図11 トレンチ2 須恵器集中範囲 平・断面図(1:80)

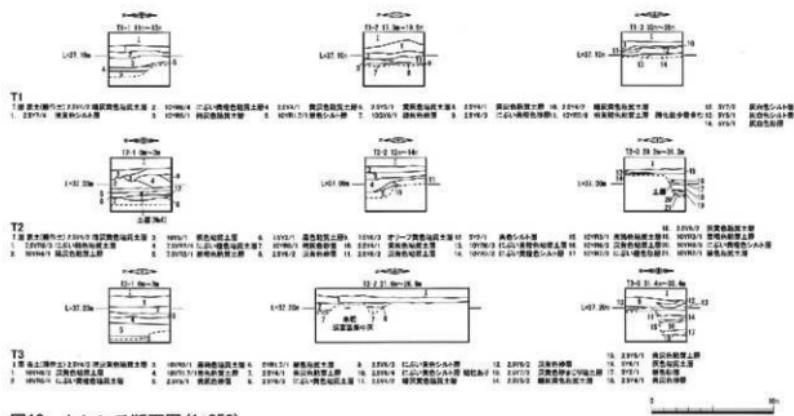


図12 トレンチ断面図(1:250)

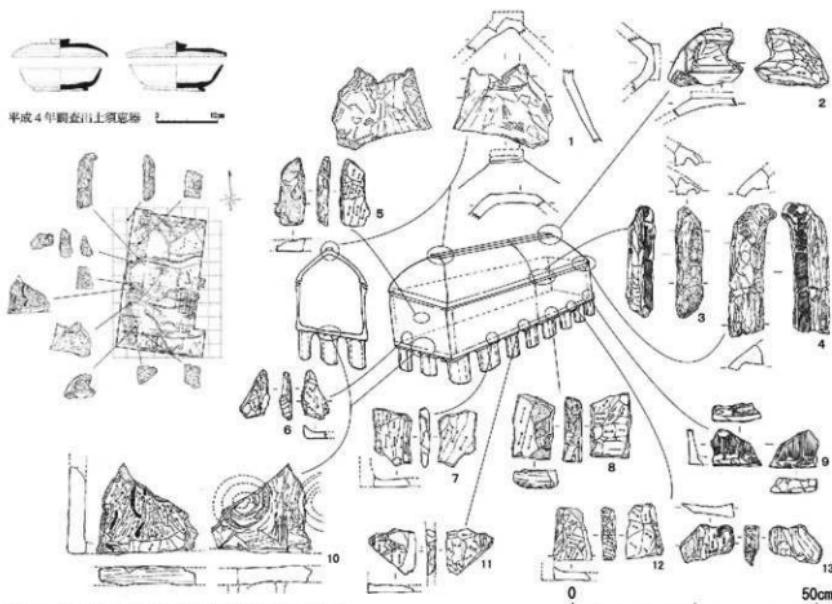


図13 塙生南遺跡 陶棺の実測図と推定部分

平成4年度の塙生南遺跡の発掘調査では、陶棺を含めた明確な遺構は確認されていない。陶棺の破片は後世の破壊を受けたため、広い範囲に散在している。図に示すように南北100m、東西は10~Y25付近までの十数mの幅に存在し、西側に片寄る山方である。陶棺は屋根形をした蓋と、箱形の身からなる。図13陶棺図は想定図であり、どの部分の破片に該当するか推定したものである。陶棺の形態は家屋四注式（寄棟式）に属し胎土・焼成がよく、土師質の薄淡褐色をしたもので、蓋部と身部の破片20点余りが出ていている。棟部は両端の破片があり、屋根の上部には、棟部幅が5cm程度で伸びる。陶棺の身部と蓋の受け部内面くびれ全体と身の底部内面にも布目痕や布目紐痕が残っている。外面はハケメ・ナデ調整で平滑に仕上げている。内面は大半にナデ調整による細かな凹凸がみられる。外底面には中空の円筒形をした脚部痕跡があり、脚部は剥落し中央と外周に丸くナデ痕跡があって、直径約8cmの大きさの円筒形脚部が付いていたと推定できる。身の底面は厚さ3cmの平坦な粘土板状をしたもので、小口跡近くと思われる上面に布目痕跡がみられ、造瓦技法との関連がみられる。底板縁辺の立ち上がり痕跡から身の厚さは1.6cmである。側面は約1.0cmの厚さの板状破片が多く存在していて、身側面にあたる破片であろう。陶棺全体の大きさや全体の形態が不明であり、想定図から出土した陶棺片をどの部分かおおよそであるが示した。当遺跡の南西方向1.8km隣れた丘陵には、7世紀末の瓦・須恵器を焼成した蓮沼新堤窯などが存在し、瓦生産が行われており、両者の関係究明が課題となる。

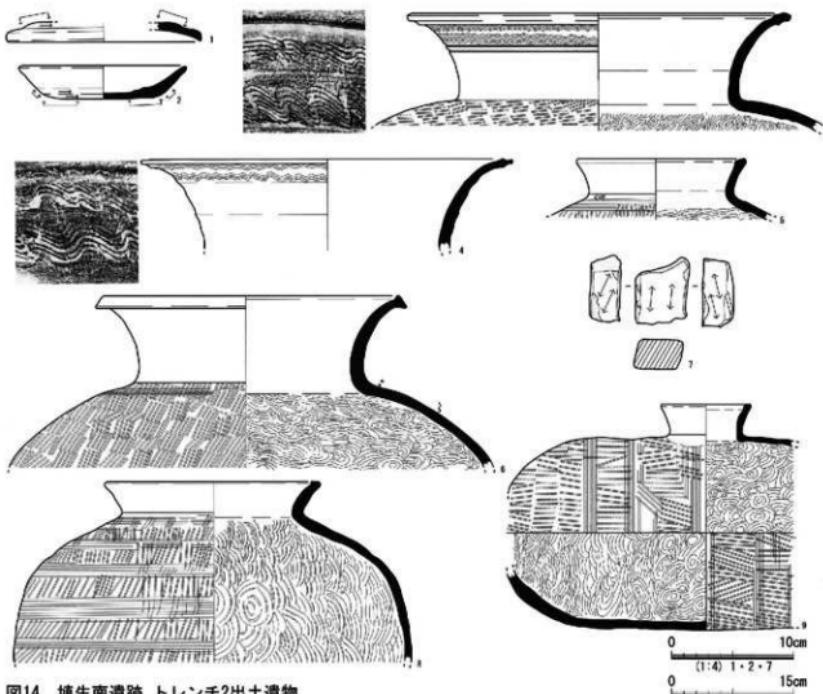


図14 墳生南遺跡 トレンチ2出土遺物

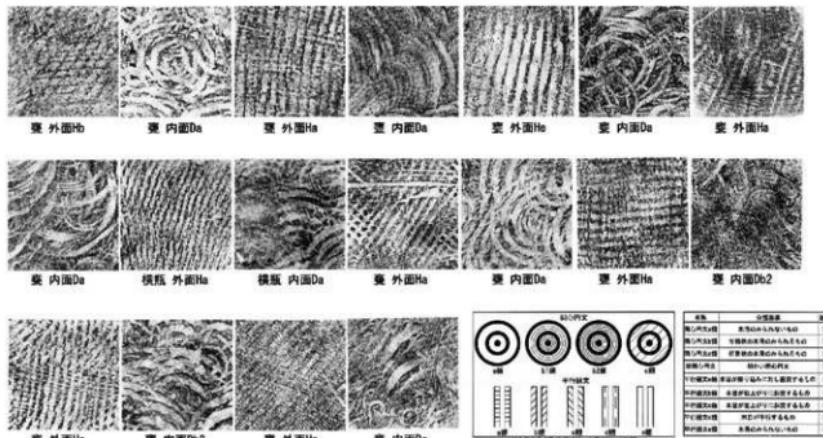


図15 トレンチ2出土須車器のたたき目の種類(拓本)

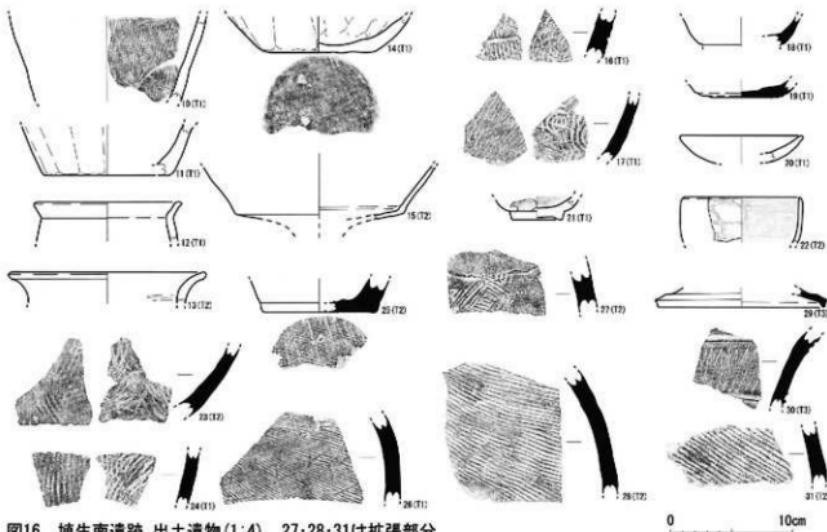


図16 塙生南遺跡 出土遺物(1:4) 27・28・31は拡張部分  
平成21年度の試掘概要

試掘調査は、11月4日から11月9日までの5日間重機により実施した。また、事前作業として稲刈り後の水田に残る、機械の旋回跡に多い水溜まりを、溝掘りで繋ぎ排水し調査の円滑化に努めた。

試掘は、各トレンチの幅が1mで、長さ35mの3本を入れて、遺構・遺物の観察を行った。東側の1トレンチでは、最深1.5mまで掘り下がったが、現在の毘沙門川改修時に伴う工事で川沿いの北側3mは深くまで搅乱を受けていた。北から12mまでの区間を深さ1.5m掘り下がったが、北から10mまで東壁側面が崩れ落ち、危険なため土層セクション図の図化を断念した。その後、平成4年度調査の遺構検出土層のカラー写真で遺構・遺物の検出状態・土質を試掘参考にした。1トレンチは北から27.5mまでの間を深さが0.9mまで掘り、前回の遺構検出土層である渴色粘土または黄褐色粘土層までとした。南端では深さ0.8mの深さまで掘り、その下の土層はシルト層であった。試掘ではトレンチ内と駆面に遺構断面層は確認できなかった。

出土遺物の検出は、遺物包含層の深さ深さ0.95mから土師器が1～2点出ている。次いで、深さ0.75～0.8mの黄褐色粘土層から須恵器・土師器がわずかに小破片で散在し出土する。また深さ0.4mから土師器・須恵器が少し出ているが、大きな破片や集中部ではなく、図示した遺物が主体である。中央の2トレンチは、北から2mの間を深さ1.5mまで掘り下がた。深さ1.2mの黒色粘土層から弥生時代末頃の杯部が出土し、1.5m下には砂層が続く。北から2.2～12.8mまでの区間は、深さ1.2mまで掘り下がた。土質は黄灰色砂層と粘土層が相互に堆積しているが遺物はなかった。また、北から21mから30.5mまでの間は灰黄褐色粘土層を深さ0.7mまで掘る。南端から3

m程は深さ1.2mまで掘り下がったが、下層に黒色粘土層があった。遺物は北から15~16mの地点で大形須恵器甕の口縁部が出土し、甕を中心にして遺物の出範囲を確認するために約26.4m<sup>2</sup>の拡張を行った。須恵器の集中部は東西方向に約6mと、南北方向に約3mの範囲から出土し、方向は南西にのびており、南端には土坑1基が存在した。

出土地は、特に土層の変色はなかったが、幅広く溝状のびた部分と推定される。同様に須恵器集中は3トレンチの南西にも確認されている。拡張部から出土した甕復元の試みでは、高さ約70cm、体部最大径約70cmで頸部直径約28cmの法量の甕であり、その破片数は360点が1m<sup>2</sup>3ヶ所に多く存在し廃棄溝の可能性がある。須恵器以外には砥石や、中世の珠洲や土師器も少量まざっていた。

2トレンチの山上遺物は須恵器集中部以外の包含層は、深さ0.55~0.6m、0.4mから須恵器、土師器がわずかに出ていている。しかし造構は検出していない。

西側の3トレンチでは、北側1mを深さ1.6mまで下げるが遺物は出土しない。北~南側の22mまでの間は、深さ1.0~0.7mまで段階的に少しづつ下げた。遺物は北から22m~26.5mの4.4mの区間に須恵器集中部がある。上層までの泥のみを除き包含層はそのまま残した。南西の南側にも少し土師器の出土があった。

図14は2トレンチと東西の拡張部出土品である。6の肩部には別の杯を置き焼いた跡があり、事例が多い。大形甕の口縁部が長く伸びた3・4・6の大形甕であり、口径は24.0~31.0cmの大きさがある。5・6は口縁部が短く「く」の字形に折れて体部に広がる二形態があり、口径14と17cmの大きさがある。9は横瓶であり大形品に属する。杯蓋1と杯身2には箋削りがみられ、時期は8世紀初め頃である。7は砂岩製の砥石で3面が磨耗している。3・4の口縁部近くに波状文を描く。下図は同区の叩き具痕の拓本である。甕の体部の大きさに大差ないと推定され、なぜ甕や大形の甕が多く廃棄されたのであろうか。

図16は10~21(13・15を除く)は1トレンチの出土であり、22は2トレンチの、29・30は3トレンチの8世紀初めの須恵器である。25は珠洲焼の底部である。26・27は特殊叩き具による珠洲甕で数少ない例である。28・31も中世珠洲の甕片で、2トレンチの拡張部から出土した。10~14は上部器であり、ハケメ調整によるものであり、叩き具導入以前の時期に当り8世紀初め頃であろう。16・17・23・24は須恵器甕で、30は波状文の甕片であり、18・19は杯である。21は褐色釉の中世の天日茶碗、22は緑釉文様をつけた近世の越中瀬戸陶である。

伊藤隆三 1993 「埴生南遺跡」『平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告概報』小矢部市教育委員会  
西井龍儀他 2002 『小矢部市 おやべ風土記編—おやべの遺跡—』小矢部市

西井龍儀 1988 『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題—資料編一』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

宮田進一他 1986 『石名山窯跡発掘調査報告』 大門町教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅういちねんどおやべしまいぞうぶんかざいはくつちょうきがいほう								
書名	平成21年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報								
シリーズ名・番号	小矢部市埋蔵文化財調査報告書第68冊								
編著者名	中井真夕 上野章								
編集機関	小矢部市教育委員会								
所在地	〒932-8611 富山県小矢部市本町1番1号								
発行年月日	西暦2010年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査対象	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)	(世界測地系)				
石名田木舟遺跡	小矢部市 地図地内	16209	169	36° 41' 18"	136° 54' 24"	20090608 20090609	1,200	経営体育 成基盤整備	
埴生条里遺跡	小矢部市 石動町606-20地 46番	16209	185	36° 40' 15"	136° 51' 43"	20091005 20091031	140,000	土地区画 整理事業	
埴生南遺跡	小矢部市 埴生282番 1, 2	16209	055	36° 39' 48"	136° 51' 22"	20091104 20091109	1,427	宅地造成	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
石名田木舟遺跡	散布地	古代か	なし		須恵器、土師器				
埴生条里遺跡	条里	中世か	なし		須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、青磁、近世陶器				
埴生南遺跡	集落 隣接地	古代	溝?、土坑		須恵器、土師器、中世土師器、珠洲			須恵器出土 集中部	

**小矢部市埋蔵文化財調査報告書第 68 冊**

富山県小矢部市

**平成21年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報**

発 行 日 平成22年3月31日

編集・発行 小矢部市教育委員会

〒932-8611 富山県小矢部市本町1番1号

TEL 0766-67-1760

印 刷 ジオミックス PR プランニング

